

小・中・高等学校におけるボランティア体験と 大学生のボランティア観の関連

荒川裕美子*¹ 保住芳美*² 吉田浩子*³

はじめに

近年、ボランティア活動の経験者は増加傾向にあり、それに伴いボランティア活動の実態調査も多く実施されている。例えば2005年に内閣府¹⁾は15歳以上の男女5,000人を対象に「生涯学習調査」を実施した。その結果、ボランティア活動に「参加したことがある」と答えた人は44.7%と、1993年の前回調査の30.1%から大幅に増えていることがわかった。また同調査は15~19歳のボランティア経験者が55.3%と、他の年齢層に比べ最も多いことを示し、若い世代におけるボランティア活動の広がりが伺えた。しかし、池田²⁾は、T大学の入学直後の新入生758人を対象に、それまでのボランティア活動経験について調べ、興味のあるボランティア活動の分野と、実際に活動したことのある分野が合致していないと報告した。若い世代のボランティア活動の充実のためには、その実態のさらなる解明の必要性があると思われる。

一方、教育課程審議会からの「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」の答申を受け、1998年に「小・中学校学習指導要領」が改訂され、翌年には「高等学校学習指導要領」が改訂された。改訂された指導要領では、「特別活動」において、「生徒の生活体験の不足、人間関係や連帯感の希薄化、集団や社会の一員としての自覚や責任感の低下などが指摘される今日、特別活動においても心の教育の充実を目指し、家庭や地域と協力し連携を深めながら、自然や文化との触れ合い、地域と人々との幅広い交流など、自然体験や社会体験等の充実を図ることが大切である。」³⁾と明示され、その実現のために「ボランティア精神を養う活動を充実するとともに、自然体験、幼児、高齢者や障害のある人々の触れ合いなどを積極的に取り上げるようにする。また、各学

校が取り上げる活動について、地域や学校の実態に応じて重点化を図るとともに、行事間の関連や統合を図ったり、練習や準備のあり方を見直したりして行事を精選する。」⁴⁾ことが推称された。

このように、教育課程の中にボランティア活動が導入される中、伊藤⁵⁾は中等後教育機関に在籍する学生341人を対象に「ボランティア」について抱くイメージと、ボランティア活動経験の関連を調査し、「若者の抱くボランティアイメージは彼らのボランティア活動経験と密接に関連していた」と報告した。また、箱井・高木⁶⁾は、ボランティア活動等の援助行動を経験することにより、援助規範意識は高まることを報告しており、教育現場におけるボランティア活動の導入は、これら副次的な効果も期待されていると考えられる。

現在の大学生の多くは「小・中・高等学校学習指導要領」が改訂された当時中学生や高校生であったと予測される。小・中・高等学校の学校教育の中で体験したボランティア活動は、彼らに何らかの影響を与えたと言えるのだろうか。また、そのような学校教育におけるボランティア活動体験は、大学入学以後の学生のボランティア活動の活性化にも繋がるのだろうか。森⁷⁾は、2002年に大学生を対象に実施した調査結果から「大学生のボランティア活動推進の大きな要素に、部・サークル活動がある」と指摘している。

そこで本論では、「部・サークル活動」を含む大学生のボランティア活動と、小・中・高等学校の学校教育課程におけるボランティア活動体験との関連を知ることが目的に、質問紙調査を実施、得られた結果から、若い世代のボランティア活動の活性化に繋がる知見を知るために、必要な手がかりについて考察した。

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

*3 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(連絡先) 吉田浩子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

方 法

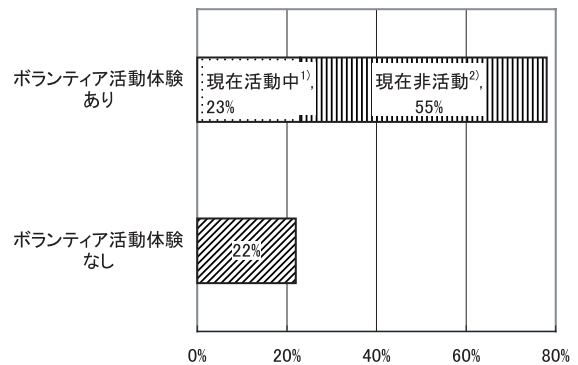
大学生のボランティア活動の実際と、ボランティア活動に対するイメージ、援助規範意識との関連を調べることを目的にアンケート調査を実施した。また、援助規範意識の測定には、箱井・高木(1987)⁶⁾の援助規範意識尺度を使用した。

本調査は、平成16年10月、X大学の任意の学生を対象に実施した。その際「この調査によって得られたデータは全て統計的に処理され、本研究以外の目的に使用されることは一切ありません。また、答えたくない質問に答える必要はありません。」と教示した。アンケート用紙は配布許可が得られた講義の開始時に配布し、講義終了後に回収した。その結果、合計505人のアンケートを回収した。無回答者の不備を除き、男性124人、女性377人の計501人を解析の対象とした(有効回答率99.2%)。統計解析にはSPSS VERSION10.0を使用した。

結 果

1. ボランティア活動の実際

有効回答者全体(501人)に、これまでのボランティア活動体験の有無について尋ねた。その結果「現在ボランティア活動をしている」学生は23%(115人)、「過去にボランティア活動をしたことがあるが、現在はしていない」学生(以下「現在ボランティア活動をしていない」学生と呼ぶ。)は55%(278人)であり、回答者全体の78%が「ボランティア活動体験者」であることがわかった(図1)。なお「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動に参加したことがあり、かつ「大学入学後、大学内のボランティアサークルへ加入」してボランティ



- 1) 現在活動している
- 2) 現在は活動していない

図1 ボランティア活動体験の有無

ア活動をしている学生は、ボランティア活動体験者の4%(16人)と大変少数であったため、「ボランティア活動の実際」では分析対象から除外した。

そこで、これらの「ボランティア活動体験者」が、これまでにどのような形態でボランティア活動に参加したのか、また、それらの活動に参加した時期について整理した(図2)。その結果、ボランティア活動の形態として「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動に参加したことがある学生は121人(「ボランティア活動体験者」全体の32%)で、その内「現在ボランティア活動をしている」学生は6人(5%)にすぎなかった。「大学入学後、大学内のボランティアサークルへ加入」して初めてボランティア活動に参加した学生は110人(29%)で、その内の68人(62%)は「現在ボランティア活動をしている」学生であった。「小・中・高等学校の授業の一環として」あるいは「大学入学後、大学内のボランティアサークルへ加入」におけるボランティ

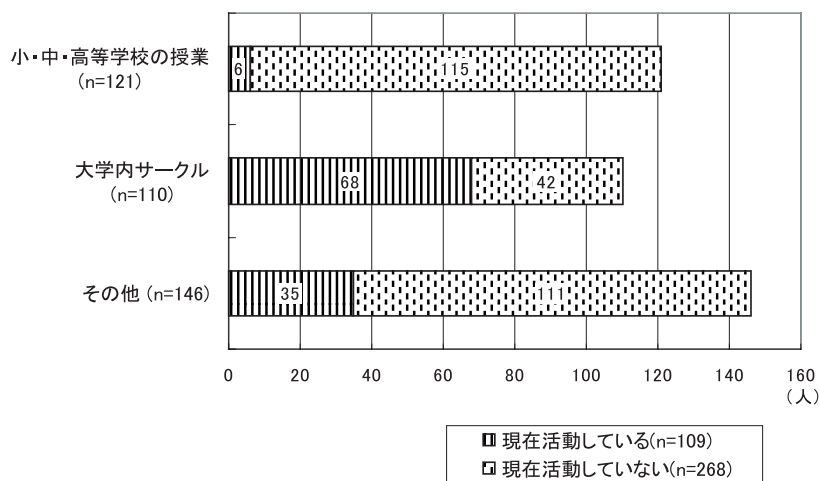


図2 ボランティア活動の形態とボランティア活動体験の関連
各活動形態を選択した人数を活動時期別に示した

体験はないが、「知人からの紹介」、「大学内・外の展示物」、「インターネットによる情報」をきっかけにその他のボランティア活動形態を体験した学生は「その他」としてまとめた(146人, (39%))。これら学生が体験したボランティア活動形態と、ボランティア活動を体験した時期に有意に関連が見られた($\chi^2=14.079$ $p<.01$)。

さらに、「ボランティア活動体験者」が参加した、ボランティア活動形態の具体的内容を調べた(表1)。ここでは、小谷⁸⁾の分類に従って「社会福祉ボランティア」(高齢者や障害を持った人などを対象とした施設、在宅介護など)、「保健・医療ボランティア」(子育て、ホスピス支援、献血など)、「環境ボランティア」(自然保護活動、環境美化など)、「地域社会ボランティア」(収集活動、募金活動など)、「教育・文化・スポーツボランティア」(図書館等の案内、遊びの指導など)、「災害支援ボランティア」、「国際交流・協力ボランティア」(NGOなど)、「その他」の8つのボランティア活動の種類を示し、あてはまるもの全ての活動種類を選択しても

らった。その結果、ここで示す3つの活動形態全てにおいて「高齢者や障害をもった人などを対象とした施設・在宅介護など」の「社会福祉」分野のボランティア活動を体験したことがある学生が最も多かったが、「小・中・高等学校の授業の一環として」あるいは「大学入学後、大学内のボランティアサークルへ加入」してボランティア活動に参加した学生は、「自然保護活動・環境美化」などの「環境」分野への参加者が2番目に多く、「その他」の方法でボランティア活動に参加した学生は、「図書館等の案内・遊びの指導」などの「教育・文化・スポーツ」分野のボランティア活動を体験したことがある学生が2番目に多かった。体験したボランティア活動形態によって、体験するボランティア活動の内容が異なる可能性が示唆された。なお、「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動を体験した学生で、現在大学のサークル等でボランティア活動を継続している学生は5%(6人)と少数であり、大学入学以前に体験したボランティア活動の種類と、その他のボランティア活動との関わりは、本調査からは明らかにできなかった。

表1 ボランティア活動形態とボランティア活動内容

	授業 (n=121)	サークル (n=110)	その他 (n=146)
1番目	社会福祉 89人(74%)	社会福祉 77人(70%)	社会福祉 98人(67%)
2番目	環境 28人(23%)	環境 57人(52%)	教育・文化 31人(21%)
3番目	保健医療 20人(17%)	地域社会 41人(37%)	保健・医療 27人(18%)
4番目	地域社会 17人(14%)	保健医療 31人(28%)	地域社会 23人(16%)
5番目	その他 12人(10%)	教育文化 21人(19%)	環境 15人(10%)

各活動形態別に、過去に体験したボランティア活動の種類を、選択した人数が多い順に示した。

()に各活動の種類を選択した人数の、各活動を体験した人数全体に対する割合を示した。

ボランティア活動形態の違いとボランティア活動に対する意欲に差があるかどうかを調べるために、「ボランティア活動体験者」がボランティア活動に関わった動機について尋ねた。まず、ボランティア活動体験のある学生全体の参加動機を図3に示した。「自分が成長していく上で必要だと思うから」と答えた学生が最も多く181人(48%)であった。ボランティア活動形態と、各参加動機を選択した人数の割合に有意に差が見られた(表2)。「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動に参加した学生は、他の機会を利用した学生に比べ「学校で推奨されたから」、「参加が義務づけられ

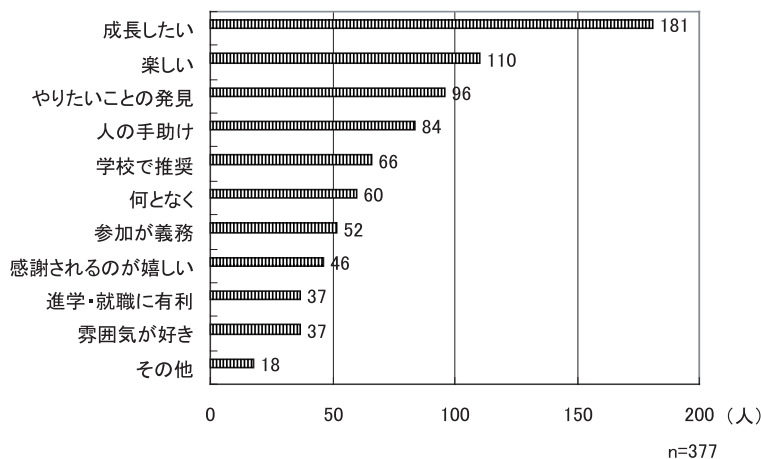


図3 ボランティア活動の参加動機(複数回答)

ていたから」と答えた人数の割合が有意に高かった(順に $\chi^2=16.140$ $p<.01$, $\chi^2=42.503$ $p<.01$)。「大学入学後,大学内のボランティアサークルへ加入してボランティア活動に参加した学生は,「誰かと触れ合うことが楽しいから」と答えた学生の人数の割合が他の機会を利用した学生に比べ有意に高かった($\chi^2=17.969$ $p<.01$)。「その他」の方法でボランティア活動に参加した学生は,「自分が成長していく上で必要だと思うから」と答えた学生の人数の割合が他の機会を選択した学生に比べ有意に高かった($\chi^2=8.514$ $p<.05$)。

2. ボランティア活動に対するイメージ

ボランティア活動に対するイメージと,体験したボランティア活動形態の関連を調べた。アンケート回答者全体(501人)に「ボランティア活動」に対するイメージについて,4件法(全く思わない,思わない,思う,非常に思う)で尋ね,それぞれに1,

2,3,4点を与えた。「全く思わない」を1点,「思わない」を2点,「思う」を3点,「非常に思う」を4点とし,自分の考えに最も近いものを1つ選択してもらった。アンケート回答者全体の各イメージの平均値を示した(図4)。「無償性の」(平均値3.50),「社会貢献している」(同3.44)「思いやりのある」(同3.42)のイメージが高いことがわかった。

これらのボランティア活動に対するイメージとボランティア活動形態の関連を調べるために,各イメージを選択した人数を算出した。その際,各イメージを示す単語について,「全く思わない」と「思わない」を選択した学生を「思わない」を選択した学生として合計し,「非常に思う」および「思う」を選択した学生を「思う」を選択した学生として合計,それぞれの人数を算出した。各イメージを選択した人数の割合に各ボランティア活動形態間で有意に差が見られた場合を表3に示した。「小・中・高等学校の授業の一

表2 ボランティア活動形態とボランティア活動の参加動機

	授業 (n=121)	サークル (n=110)	その他 (n=146)	合計人数	検定値
成長したい	45人(23%)	60人(31%)	76人(40%)	181人	8.514 p<.05
楽しい	21人(18%)	47人(40%)	42人(36%)	110人	17.969 p<.01
やりたいことの発見	22人(18%)	33人(30%)	41人(29%)	96人	
人の手助け	26人(21%)	32人(29%)	26人(18%)	84人	
学校で推奨	35人(49%)	14人(20%)	17人(24%)	66人	16.140 p<.01
何となく	18人(15%)	21人(19%)	21人(15%)	60人	
参加が義務	37人(67%)	5人(9%)	10人(18%)	52人	42.503 p<.01
感謝されるのが嬉しい	17人(14%)	15人(14%)	14人(10%)	46人	
進学・就職に有利	13人(11%)	10人(9%)	14人(10%)	37人	
雰囲気が好き	12人(10%)	10人(9%)	15人(11%)	37人	
その他	3人(2%)	2人(2%)	13人(9%)	18人	

各ボランティア活動形態を選択した人数全体に対する,各ボランティア活動の参加動機を選択した人数の割合を示した。各ボランティア活動の参加動機及び各ボランティア活動形態を選択した人数の割合に有意に差が見られた場合のみ,表中に χ^2 値及び危険率を示した。

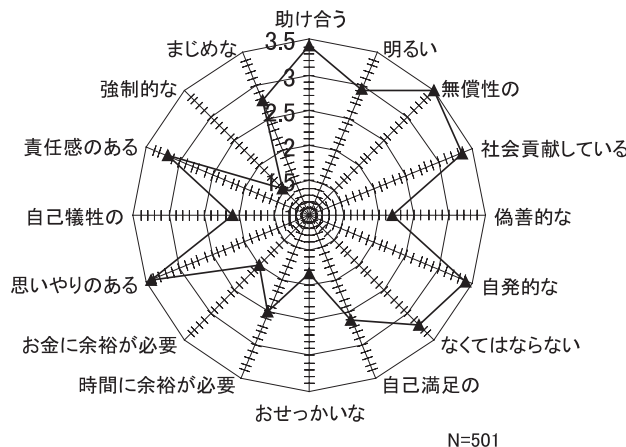


図4 ボランティア活動に対するイメージ

表3 ボランティア活動形態とボランティア活動に対するイメージ

	授業 (n=121)	サークル (n=110)	その他 (n=146)	検定値
1. 無償性の 思う (n=331)	110人 (33%)	100人 (30%)	121人 (37%)	3. 819 p<. 05
思わない (n=46)	11人 (24%)	10人 (22%)	25人 (54%)	
2. 自発的な 思う (n=338)	99人 (30%)	103人 (30%)	136人 (40%)	7. 235 p<. 01
思わない (n=39)	22人 (56%)	7人 (18%)	10人 (26%)	
3. なくては 思う (n=299)	95人 (32%)	96人 (32%)	108人 (36%)	2. 783 p<. 05
ならない 思わない (n=78)	26人 (33%)	14人 (18%)	38人 (49%)	
4. 自己満足 思う (n=163)	51人 (31%)	46人 (29%)	66人 (40%)	37. 747 p<. 01
思わない (n=214)	70人 (33%)	64人 (30%)	80人 (37%)	
5. 時間に 思う (n=201)	66人 (33%)	69人 (34%)	66人 (33%)	6. 909 p<. 01
余裕が必要 思わない (n=176)	55人 (31%)	41人 (23%)	80人 (46%)	
6. 自己犠牲 思う (n=100)	35人 (35%)	19人 (19%)	46人 (46%)	7. 109 p<. 01
思わない (n=277)	86人 (31%)	91人 (33%)	100人 (36%)	

各活動形態別に、「ボランティア活動に対するイメージ」を示す言葉に対して「そう思う」あるいは「そう思わない」を選択した人数を示した。()に各イメージに対する言葉に対して「そう思う」あるいは「そう思わない」を選択した人数全体に対する、各ボランティア活動形態を選択した人数の割合を示した。表中には各ボランティア活動形態と、ボランティア活動のイメージに有意に関連が見られた言葉について表中に χ^2 値及び危険率とともに示した。

環として」ボランティア活動に参加した学生は「自発的ではない」というイメージを選択した人数の割合が、他の機会を利用した学生に比べ有意に高かった ($\chi^2=7.235 p<.01$)。「大学入学後、大学内のボランティアサークルへ加入」によりボランティア活動に参加した学生は、「自己犠牲」というイメージを選択した人数の割合が他の学生より有意に低かった ($\chi^2=7.019 p<.01$)。「その他」の方法でボランティア活動に参加した学生は、「無償性ではない」、「なくてはならないものではない」、「自己満足ではない」、「時間に余裕が必要ではない」というイメージを持つ学生が多かった(順に $\chi^2=3.819 p<.05$, $\chi^2=2.783 p<.01$, $\chi^2=37.747 p<.01$, $\chi^2=6.909 p<.01$)。

3. ボランティア活動と援助規範意識

箱井・高木⁶⁾は、ボランティア活動等の援助行動を体験することにより、援助規範意識は高まると報告した。本論においても、体験したボランティア活動形態と援助規範意識の関連を知るために、1987年に、箱井・高木が作成した、援助規範意識尺度(29項目)を用いて調査を行った。

得られた結果を解析したところ、回答者全体の平均値は97.6(標準偏差8.7)であった。ボランティア活動形態別に得点の平均値を表4に示した。ボランティア活動形態間と援助規範意識との関連を調べるために分散分析を行った結果、ボランティア活動形態間で援助規範意識得点の平均値に有意に差が見られた($f=3.032 p<.05$)。「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動に参加した学生は、

表4 ボランティア活動形態と援助規範意識

	授業 (n=121)	サークル (n=110)	その他 (n=146)
平均値	99.0	96.5	96.7
標準偏差	9.0	7.9	8.7

「大学入学後、大学内のボランティアサークルへ加入」及び「その他」のボランティア活動形態を利用した体験のある学生に比べ、援助規範意識得点の平均値が有意に高かった。

考 察

本調査の結果、アンケート回答者の78%の学生が「ボランティア活動を体験した」と認識していることがわかった。現在ボランティア活動に参加している学生の62%は大学内のサークルで初めてボランティア活動を体験した学生であり、この割合は、森⁷⁾の調査結果とほぼ同じであった。大学生のボランティア活動とサークルは大きく関わっていると言える。しかし、「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動を行った学生の95%は、現在はボランティア活動に参加していなかった。「小・中・高等学校の授業の一環として」のボランティア活動体験は、大学入学以後のボランティア活動とは結びつかないと言える。このことは「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動を体験した学生は、他の機会を利用した学生に比べ、ボランティア活動への参加動機として「学校で推奨されたから」、「参加が義務づけられていたから」と答えた人数の

割合が有意に高く、「自発的ではない」というイメージを持つ学生の人数の割合も有意に高かったことと関連すると思われる。

本来ボランティアとは「自発的な意思に基づき社会に貢献すること」と定義される(「中央社会福祉協議会意見具申」厚生省1993年⁹⁾。「小・中・高等学校の授業の一環として」の活動には「教育の一環であり、非自発的で、教育的効果を求めて企画、実施、監督、評価されるもの」(「サービスマーケティング」)や「学校における授業の一環として行う地域活動」として挙げられる「コミュニティサービス」などがあり¹⁰⁾、本来の「ボランティア活動」とは区別される。しかし、本調査対象者における「ボランティア活動体験者」の活動の中には「小・中・高等学校の授業の一環として」の活動や「参加が義務づけられていた」活動が含まれていたため、本調査対象者は、このような区別はしていないことがわかった。調査対象者が体験した学校教育の中で「ボランティア活動」として取り入れられている活動の多くは、例えば、他者への思いやりなど豊かな感性を育むことを通じて、社会性や市民性を身に付ける¹¹⁾「サービスマーケティング」でも、地域貢献活動であり、学校教育の場面では、一定のノルマとして位置づけられる¹²⁾「コミュニティサービス」でもなく、自発性と社会貢献を前提とする「ボランティア」でもない活動であると言えよう。その結果、「小・中・高等学校の授業の一環として」のボランティア体験は、大学生になった後のボランティア体験に直接つながらないことが示唆された。

一方、援助規範意識については、「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動を体験した学生の援助規範意識得点の平均値が、そうでない学生より高かった。これは、学校で「このような行為が正しい」と教えられた結果であると考えられることができるが、知識として「正しい行為」を知ることと、「実際にそのような行動をとること」は別のことであろう。現在の「小・中・高等学校の授業の一環

として」のボランティア活動が具体的な援助行動につながるかどうかは今回の調査では明らかにすることができず、今後の課題である。

以上のことから、若い世代のボランティア活動のさらなる充実を測ることを目的とした知見を知るためには、その第一歩として、まずは「ボランティア活動」とは、どのような行為であると認識されているかを明らかにすることが重要であると考えられる。学校教育におけるボランティア活動体験の効果を期待されている若者が抱く「ボランティア観」はいかなるものなのか。柴崎¹³⁾は「現在多くの人々がボランティア活動に踏み切っていない原因の一つとして、ボランティア活動をどう考え、どう捉えているのか、その「ボランティア観」の違いがある。」と述べた。次世代を担う現代の若者の「ボランティア観」を知ることが、我が国のボランティア活動が抱える課題の明確化に繋がり、その発展に必要な手がかりを得ることができると思われ、このような研究を継続することの重要性が示唆された。

結 論

大学生のボランティア活動と、小・中・高等学校の学校教育の中でボランティア活動体験との関連を知ることを目的に、X大学生を対象に調査した。その結果、調査対象者が、小・中・高等学校の学校教育の中で体験したボランティア活動の中には、ボランティア活動に対して「非自発的」なイメージを抱かせる活動が含まれ、学生が体験した「ボランティア」と呼ばれる活動は、大学入学後のボランティア活動につながらないことが示唆された。従って、今後、若者がいかなる活動を「ボランティア活動」として認識しているのかをさらに明確にし、教育課程における、彼らの体験とボランティア観の関連を探究することが、若者の世代のボランティア活動のさらなる充実を希求する手がかりとして必要であることがわかった。これらの点については、順次調査を進める予定である。

文 献

1) 内閣府：生涯学習調査

<http://www8.cao.go.jp/survey/h17/h17-gakushu/>, 2005.

2) 池田幸成：子どもたちの参画を育むために ―ボランティア体験のデータをよむ―、ボランティア白書2003, 初版, 社団法人日本青年奉仕協会(JAVA), 東京, 31-40, 2003.

3) 森嶋昭伸：新中学校教育課程講座 特別活動 . 森嶋昭伸, 鹿島研之助編, 第3版, 株式会社ぎょうせい, 東京, 28, 2003.

4) 森嶋昭伸：新中学校教育課程講座 特別活動 . 森嶋昭伸, 鹿島研之助編, 第3版, 株式会社ぎょうせい, 東京, 136, 2003.

- 5) 伊藤一統：青少年のボランティアに関するイメージと経験についての調査研究，教育学研究紀要（中国四国教育学会），48（1），336-441，2002．
- 6) 箱井英寿，高木修：援助規範意識の性別・年代・および世代間の比較，社会心理学研究，3（1），39-47，1987．
- 7) 森法房：山口県立大学における学生のボランティア活動に関する調査報告，山口県立大学社会福祉学部紀要，8，39-53，2002．
- 8) 小谷直道：市民活動時代のボランティア，初版，中央法規，東京，151，1999．
- 9) NPO 団体 Tails：ボランティアの定義
<http://park17.wakwak.com/~tails/soudanteigi001.htm>，2006．
- 10) スペースアルク：ボランティア用語集
http://www.alc.co.jp/clubalc/vj/word/03_01.html/，2005．
- 11) 岡本栄一：ボランティアのすすめ —基礎から実践まで—，初版，ミネルバ書房，京都，74，2005．
- 12) 岡本栄一：ボランティアのすすめ —基礎から実践まで—，初版，ミネルバ書房，京都，138，2005．
- 13) 柴崎あい：ボランティア観とボランティア活動の関連性についての調査研究，教育学研究紀要（中国四国教育学会），43（1），279-284，1997．

（平成18年5月31日受理）

The Effects of Volunteer Activity Experiences in School Education on Youth

Yumiko ARAKAWA, Yoshimi HOZUMI and Hiroko YOSHIDA

(Accepted May 31, 2006)

Key words : volunteer activity, university students, school education

Correspondence to : Hiroko YOSHIDA

Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.16, No.1, 2006 133-139)